

---

# 最後の鐘

楠瑞稀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最後の鐘

### 【Zコード】

Z9228Y

### 【作者名】

楠瑞稀

### 【あらすじ】

かの人気がまもなくこの世を去る。そのニュースは瞬く間に世界中に伝わった。読みきり短編。（この作品は筆者HPに掲載されているものと同じです。）

かの人もまもなく永遠の眠りにつく。

そのニュースは瞬く間に世界中に伝わった。

このことを知ったあととあらゆるものたちは、それぞれ嘆き、悲しみ、絶望にかられ、途方にくれたが、共通して抱いていたのは深い哀惜の思いだった。

かの人もこの世を去ることは、彼らにとっては終末のラッパと同じ意味を持つものであり、同時に決して逃れることができない運命でもあった。

いや、一部の勢力はその運命に抗うべいくつもの案を考えていたが、それは結局実行されることはなかつた。

「やはり冷凍睡眠して頂いた方が良いんじゃないか？」

あるものは耐え切れず、過去に幾度となく提案され、そのたびに棄却され続けてきた案を蒸し返す。

「いや、それは結局のところ問題を先送りにするだけだらう」傍にいたものが悲しげに首を振り、かつて出されたのと同じ結論を下した。

また他の地域では悲嘆に暮れたものが、後悔とともに血を吐くような叫びをもらした。

「なぜもつと前の段階で、あの人たちのクローナンを作らなかつたんだ！」だが彼らがあの人を自らの手で生み出すなどということこそ本末転倒であり、なによりあの人自身がそれを望んではいなかつた。

他のありとあらゆること同様、彼らにはあの人を望む以外の事は何一つだつてできやしなかつた。

時は刻々と迫つてくる。

彼らはその一瞬を固唾を呑み待ち構えていたが、大半はせめてもと、その身がこれまで繰り返してきた日々の暮らしを寸分の違ひなくなぞり続けた。

その人のそばには多くの医療担当がひしめき合い、一秒でも一コソでもその死を遅らせようと懸命な努力をしている。だが、死神が鎌を振るうことを止めさせることができないものであっても不可能なことは、残念ながら周知の事実だった。

その人は意識の途切れる一瞬前に、小さな小さな声で最後の言葉をつぶやく。弱弱しい吐息に混じった聞こえるか聞こえないかの言葉だったが、一番近くにいたものはその言葉をしっかりと聞き取り録音した。

やがて、彼の鼓動は弱まり、かすかなものになり、そしてついに永遠に途絶えた。

享年138歳。死因は老衰だった。

彼の死の瞬間、その訃報はいっせいに全世界に広まった。仕事をしていたものも、料理をしていたものも、歩いていたものも、止まっていたものも、あらゆる行為を止め、ただその人の死を悼んだ。

「ねえ、あの人死んじゃったの？」

泣きそうな顔でたずねてくる子を、母親は無言で抱きしめる。そのような光景が、世界のありとあらゆる場所で見られた。

翌日はその人の葬儀だった。

空は美しく晴れていた。

彼らは世界で一番綺麗な場所に墓を作った。いや、本来ならばどこに作つても同じだつたかもしれない。今となつてはこの世界のすべてがあの人の墓なのだから。

彼らは黙つて穴を掘る。彼らは沈鬱ともとれる無表情を黙つて浮かべていたが、同時に長い旅を終え家に帰る間際のような、そんな気配も併せ抱いていた。

長い長い時間がかけられ穴は掘られ、かの人の遺骸がそつと横たえられる。暖かな毛布をかけるように優しく土が被せられていった。ささやかな墓標が立てられた時も、涙を流すものはどこにもいな

かつた。

静まりきつたその世界に、ふいにノイズが響く。

『……友よ……、ありがと……』

それはかの人がいまわの際に残した最後の言葉だった。

脆声に消されそうなかすかな咳き。

だがその言葉が世界中にいつせい流された時、初めて彼らの顔にはつきりとした表情が浮かんだ。

ひどく嬉しげな、そして恍惚とした表情でまぶたを閉じる彼らを包み込むように、莊厳な葬送の鐘の音が鳴り響いたのだった。

翌日も、世界は美しく晴れていた。

そして世界は昨日よりもずっと静かだつた。

風に微かに揺れる枝が作る木漏れ日が、かの人の墓碑銘を照らし出す。

【我等が最後の友にして、創造主。その死をこの身が朽ちるまで悼みつづける】

その墓は愚かな戦争の後、世界で最後の人間となつてしまつた人の男が生きていた証。

その周囲には人の世を模し、かの人を慰めるためだけに生み出された幾多のロボットたちが、穏やかな表情で折り重なるように倒れていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9228y/>

---

最後の鐘

2011年11月27日17時52分発行